■ 2022.1.25　No241

脱原発情報

発行　双葉地方原発反対同盟　　責任者　石丸小四郎
970 － 8026　いわき市平童子町３－６　Ⅱ 903
TEL・FAX　0246-25-7737　携帯　090-4477-1641
E -mil：ishimaru19430106@gmail. com　ブログ「石丸日記」

小児甲状腺がん患者　６人　東電提訴へ
過酷事故当時６～16歳だった！

原発事故から 11 年目…これまで固く口を閉ざしていた小児甲状腺がん患者が立ち上がり「なぜ私が甲状腺がんになったか知りたいのです」「自身の甲状腺がんは福島東電第一原発過酷事故の影響だ！」として、今月 27 日、同社を訴える集団訴訟を起こすことになった。その勇気に心から敬意を表し支援をしたい！（注１）

2011 年３月の同原発事故時、福島県内に住んでいて甲状腺がんになった 17 ～ 27 歳で男女６人（資料１）が、がんの発症は原発事故による被ばくが原因だとして東電に計６億 1,600 万円の損害賠償を求める訴訟を 27 日に東京地裁に起こすことになった。

（資料１）「生涯ホルモン剤が必要になった」と薬を示した

（資料２）の弁護団が 19 日に記者会見して明らかにした。

一方、福島県の健康調査検討委員会は、「甲状腺がんと被ばくの因果関係は現時点で認めていない」としている事から、訴訟では因果関係の有無が争点となる見込みとなろう。６人は事故当時は６～ 16 歳だった。12 ～ 18 年に甲状腺がんと診断され２人が甲状腺の片側を切除し、４人は全摘出してホルモン薬の服用が生涯必要という。１人は肺に転移している。

（資料２）　井戸弁護団長が中心となり決意を示す

この人たちは現在、県内、都内や神奈川県に住んでいる。原発事故時、未成年で甲状腺がんと診断された人たちの集団訴訟は初めてである。福島県は事故時に県内に住んでいた 18 歳以下の住民ら約 38 万人に甲状腺調査を実施し、2021 年 10 月現在 266 人が悪性ないし、その疑いと診断されている。221 人が手術によりがんと確定されている。

弁護団によると、６人のうち５人は、この調査でがんが判明し、1 人は自主的に病院で検査を受けた。更に、「福島県の調査で、がん発見率は、通常より数十倍高い。県は治療の必要がないがんを多数見つけている『過剰診断』の可能性を指摘しているが、原告のがんは実際に進行している」と指摘。　６人のがんはいずれも遺伝性の可能性は低いとし、原発事故が原因の可能性が極めて高いとしている。

水俣病など過去の公害訴訟では、加害企業が病気と因果関係がないことを立証できなければ賠償責任を負うとした判例があり、弁護団は原発事故にもこれが当てはまるとしている。

井戸弁護団長は**「進学や就職などに困難をきたし、将来の夢を諦めてしまった原告もいる」**と話している。全面支援して勝訴したいものである！

1972年結成！「双葉地方原発反対同盟」
半世紀…原発なき日本を実現させよう！　①

1954 年（S29）米国のビキニ環礁での水爆実験により第五福竜丸被爆事件が発生。翌年、国連総会で同アイゼンハワー大統領の「Atoms for Peace」（平和のための原子力）宣言により、日本は一挙に原発建設に走り始める。

・1955 年（S30）～政界では中曽根康弘氏、読売新聞社主・正力松太郎氏が推進役となり、保守３党による原子力予算２億３千 500 万円を可決成立する。（ウラン 235 をもじったもの）

・1956 年～「日本原子力産業会議」（現・協会）が発足。原発推進プロジェクトとして日本全体が走り始める。

・1958 年～東電が大熊・双葉両町にまたがる地点を原発建設適地として確認する。

・1961 年～大熊・双葉両町議会が「原発誘致決議」を行う。

・1964 年～「福島県開発公社」民有地、法人所有地約 200 平方㍍を確保し東電に引き渡す。（県が土地買収を担っていた）

これらの動きは全て秘密裏で行われていた。この頃から「大熊・双葉両町を跨ぐ地点に原子力発電所と言うものが建設されるらしい」と噂が出始めた時期でもあった。

1965 年当時、社会党県本部、原水爆禁止県民会議、全日農県連合会議、県労働組合協議会等が中心となり（資料１）のように「原発を考える全県活動会議」が開かれている。　原水禁国民会議・初代議長、森滝市郎氏の「核と人類は共存できない！」をどう具現化するのかであった。

（資料３）「原発を考える全県活動者会議」を開催していた

そのため「原発公害出すな！」のデモ行進が行われていた。

1971 年、（資料２）の第一原発の運転開始から間もなく事故が続発した。特に、「出力制限」や原子炉スクラムやトリップ（緊急停止等）の異常事態が発生…特に深刻だったのが「燃料棒ピンホール」（亀裂や穴が発生）し、原子炉建屋内に「放射能が降り積もる！」（働いていたｼﾞｬｰﾅﾘｽﾄが告発）などの事態が続発したのである。

福島発電所１号機（ＢＷＲ、460ＭＷ　71.3.26運開）

年月日	原子炉の状態			事故の概要	原因
71・4・27	運転中	実施	出力制限	オフガスコンプレッサ修理（400ＭＷ制限）	製
5・1	〃	発生	停止、５日	タービンバイパス弁リークオフ配管もれ、空気汚染	〃
6・3	〃	〃	出力制限	オフガス・コンプレッサ・ダイヤフラム弁損傷、出力20％減	〃
6・20	〃			作業員が誤って運転中のオフガスコンプレッサ室に入り2.5レム被ばく	被ばく
6・28	〃	〃	スクラム	豪雨のため流量リレー短絡、循環水ポンプトリップ、復水器真空低下、トリップ	誤動
7・19	〃	〃	トリップ	送電線落雷により２回線トリップ、バイパス弁により炉運転継続	
9・	定検中	発見		燃料棒ピンホール８本　13)	材

（資料４）　出力制限、スクラム、トリップ、燃料棒ピンホールなどが続発

（資料５）　1972 年「双葉地方原発反対同盟」結成

1972 年（資料３）のように浪江町の私立幼稚園を借りて「双葉地方原発反対同盟」を結成した。何故「幼稚園か？」は「原発反対の主張する者には公共施設は貸せない」との理不尽な実態が進んでいたのだ。

東電第一原発は運転開始当初から満足に原発が動かない事態が続き 40 年後の過酷事故を暗示していたことになる。

再開後　64 回目 東電交渉
海洋放出計画の概要の説明を受け問題点の抽出を行った！

1 月 19 日、13 時から再開後 64 回目の東電交渉が行われた。今回は汚染水の海洋放出問題で東電の実施計画の説明を受けた。

〔質疑事項〕

（1）2021 年 8 月 25 日の「多核種除去設備等処理水の取扱に関する検討状況について」海洋放出計画について

①測定・確認用設備について～浄化の確認方法､各核種の年間放出量・総排出量

②希釈設備について～立抗の混合・希釈の直接確認方法

③取水放出設備について～海底ボーリング調査の実施状況、トンネル設計、費用

④海洋モニタリングについて～海水、魚類、海藻類の採取場所

⑤トリチウム分離技術の調査について～第三者機関の業務委託の内容

⑥放射性物質の第三者機関による測定確認について

（2）2021 年 11 月 17 日の ALPS 多核種除去設備、処理水の海洋放出に係る放射腺影響報告書について

（3）これまでの質問事項への回答と質疑

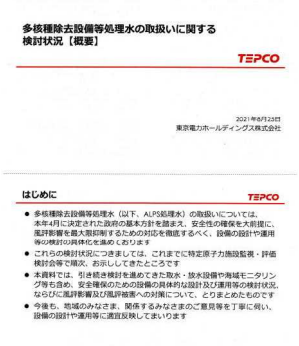
①凍土遮水壁の温度上昇の原因は？

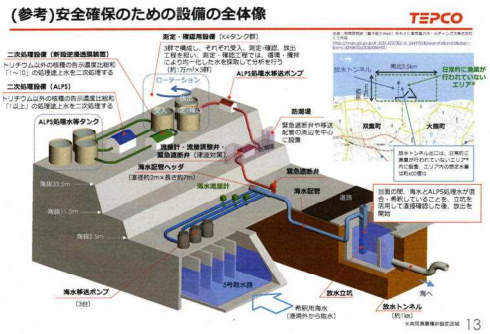
②ＡＬＰＳ多核種除去設備処理のﾌｨﾙﾀｰの破損について？

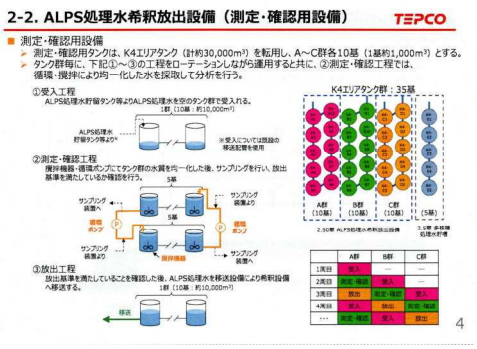
③ロボットの回収機の汚染状況、12 機の総額、使用毎の契約内容は？　　以上

（1）について

（東電）～本評価について







（資料６）多核種除去設備検討状況　　**安全評価全体像**　　**放出設備の概要**

（資料６）の３点（2021.8.25・同.11.17・同.12.21）について説明したい。

海洋放出について

■政府の「基本方針」を踏まえ、設計及び運営により放出を行った場合、環境への影響について、国際的な認定方法で定めた。

■線量限度や線量目標値が人及び環境に軽微であること。

■原子力規制委員会の実施計画の意見やレビューなどを通じ評価を見直す必要が出てくる。

■ 放射線の影響に関する科学的情報を継続的に発信する。

具体的には

①北防潮堤の一部を改造し、港湾外の海水を希釈し仕切堤で港湾内と分離する。港湾内の海水と希釈用の海水が直接混同しないようにする。

② ALPS 処理水の放出設備はＡ～Ｃ群各 10 基 1,000 ﾄﾝ、測定、確認行程では循環、攪拌により均一化した水を採取して行う。

時間の関係上**（2）**の説明だけになった。　以上

満蒙開拓団から葛尾開拓そして原発事故避難
波乱の生涯　葛尾村岩間さん

斉藤章一

昨年 12 月、編集委員を中心に葛尾村に住む岩間政金さん（96 歳）を訪ねた。岩間さん宅は以前にも訪問し、既報 233 号でそのあらましを報告したが、今回の聞き取りの概要を報告したい。

（資料 7）は現在も岩間さんが住んでいる葛尾村の自宅である。石丸代表は 2 度目であったが、到着するまで行きつ戻りつ予定の 2 倍ほど時間を費やした。葛尾村役場から東へ数キロ走った先の山間にポツンとたたずんでいる 1 軒家を見つけた時は一同ホット胸をなで下ろした瞬間だった。

（資料7）　森林の中にポツンとたたずむ岩間さんの家

岩間さんは 96 歳という高齢にも関わらず元気に対応していただいた。既報にも書かれているが、岩間さんは長野県飯田の生まれ。11 歳で満蒙開拓団として両親と共に満州吉林省に入植した。開拓は順調にすすんだが 19 歳の時に召集された。その後まもなくソ連軍が侵攻するにいたって開拓地を追われ家族もろとも必死の逃避行がはじまる。半年もの間必死で逃げに逃げてやっと新京について、その後帰還船に乗って帰ることができたという。取材する私たちに岩間さんは言葉をつまらせ涙ながらにつらい思い出を一言ひとこと話してくれた。

（資料8）　牛魂碑　手塩にかけて育てた牛全頭が殺処分に

日本に着いて故郷の長野に戻ったが、そこにはすでに住む家もなく新たなすみかを求めざるを得なかった。そして数十家族の開拓団と共にたどり着いたのが福島県の葛尾村だった。岩間さん一家は再び一から山林を開拓し、田畑を人手でコツコツ拡大し、10 町歩まで広げたというからその強い精神力に敬服する。しかし、ここでの厳しい開拓や農作業は岩間さんにとってはやりがいのある楽しい時間だったと目を輝かして話してくれた。

その後、県の支援もあり牛を飼い生活は安定したが、ついに 2011 年 3 月11.日の原発大震災を迎える。

岩間さんは心血を注いで築き上げたこの土地を離れるのがいやで、役場職員が何度も人を変え、言葉を替えて避難を促してきたが、家の鍵をかけ長期間、閉じこもっていたそうだ。しかし、やがて福島市に避難することになり、福島から牛の世話に 2 日毎に通ったのだが、日に日に牛が弱っていく姿をみる。追い打ちをかけるように全頭殺処分の要請が出され、手塩にかけ育て上げた牛が目の前で殺される姿に涙が止まらなかったという。

私たちは、「原発事故・東電・国に対してどんな気持ちですか？」と質問したが、岩間さんは「何もないな」とポツリと話した。96 年の長い長い波乱の生涯の終盤に訪れた原発事故の悲劇さえ、太平洋戦争に翻弄されながらも新天地に希望を持ち続け、全力で生き抜いてきた彼の人生の一幕に過ぎないようだ。

（資料9）岩間政金さん（2021年12月）

私たちは改めて、岩間さんの人生を理不尽に襲った戦争や原発事故などを引き起こした愚かな人間の行為を 2 度と繰り返すまいと胸に刻んだ。

「急性白血病死」の叔父の死に直面して！

坂口　美日

「震災関連死」は 2021 年 12 月の復興庁の発表によると全国で 3,784 人、うち福島県は 2,329 人、全国比 62 %と異常に多い。2013 年、葛尾村に、住み続けた叔父・清氏の「急性白血病」に疑問を持った姪の坂口美日さんに投稿していただいた。

2013 年 12 月 28 日、清・叔父は「急性白血病」で亡くなった。76 歳だった。弟の訃報を受け、かけつけた母が目にした遺体は、細面で痩身の健康体だった面影は微塵もなく、全身が浮腫（むくみ）で膨れ上がった別人のもののようだったと‥「あれは放射能の影響に違いない…と！」この話題になると決まって母はそう話す。

（資料10）　　葛尾村 のどかな風景だが 11 年前の現実は…

清・叔父は、（資料10）の葛尾村で農家の次男として生まれた。結婚を機に村の中心地の落合に土地を借り、掘立小屋から始めたラーメン屋は、やがて『石井食堂』という名前の「味良し盛り良し」で評判の店となり、村内はもちろん遠くから、わざわざ食べに来る客もいるほどだった。そして確かに、清・叔父の作るラーメンは美味しかった。

石井食堂はその後も娘夫婦と共に店を広げ順調に営まれてきた。そして 2011 年 3 月 11 日に原発事故に被災。一家で三春町の貝山仮設住宅に避難し、『石井食堂』を仮設内に再開した。しかし、当時 73 歳だった清・叔父は、仮設での食堂の一切を娘夫婦に譲り、隠居の身となった。　そして毎日のように葛尾に通い、春は山菜を食べ、秋はきのこを食べ、水を飲み、育てていた鶏の卵を食べ、原発事故前と少しも変わらない味覚を楽しんでいたらしい。周囲から放射能に気をつけるよう注意されても「俺はもう歳だから大丈夫だー、こんな美味そうなもの食わねでいられっか！」と聞く耳もなかったという。

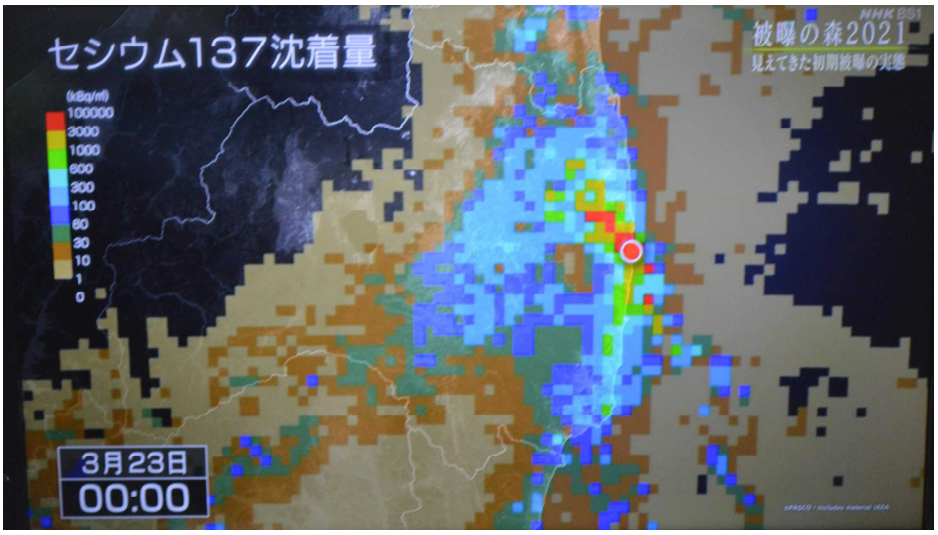
私の父が今年発行した『ふるさとは帰るところにあらざりき』（著者:小島力発行:西田書店）で清・叔父の死について以下の通り触れている。

文中のヤス子とは私の母のことである。

「清が入院したという連絡が届いたのは、原発事故から三年目の八月末である。足腰の痛みや風邪ひき程度の軽い症状はともかく、入院などという例は今まで只の一度もない、健康体の弟であった。　最初は喉首の腫れから始まって、次第に腰が利かなくなり立ち居も不自由になったことから、近くの医院で診察を受けた。ただちに入院と決まり、郡山市の寿泉堂病院に救急車で移送された。病名は「血液のガン」と告げられ、集中治療室に入ったという。ヤス子が早速見舞いにかけつけた。集中治療室に入った時期から昏睡状態で、誰が行っても意識がないとのことで、弟の手を握って「ヤッコ姉ちゃんだど。分かったら指で握り返せ」と声をかけても、何の反応もなかった。

その清が亡くなったのは、十二月末である。葬儀は船引町の斎場「光琳」で執り行われた。お寺の都合と焼場の順番もからんで、年末ぎりぎりの大晦日であった。型通りに葬儀が終わって、精進落としの宴会場では、先ず実家の長男石井栄一が、親戚代表で御礼の言葉を述べた。次の献杯の発声が私である。「献杯の前の長々しい挨拶が歓迎されないことは十分承知の上で、少し弟、清の思い

出を語らせていただきたい」と前置きして、昨年七月初め石井食堂を訪ねた経過と、彼が毎日のように村に帰っていた事実に言及した。「そのことは彼がそれほどまでにこの村を愛し、家族とその食堂を愛し、そこで生きてきた日々の記憶を大切にしてきたことの、証しであろうかと考えます。だからといってそのために生命を奪われるということが、あっていいものでしょうか」私はこの場の大方の人々が、「避難指示に反して毎日のように村に帰り、茸も食ったしタラの芽も食った。こうなったのも吾が好き(自業自得)だ」と思っているに違いないと推測した。果たして本当に自業自得か。村を愛し毎日通い詰めなければいられない思いが、結果して死につながってしまうという事実を、当り前のように受け止めてしまっていいものか。原発事故さえなければ、このような結末にはならなかったのだ。



（資料11）葛尾村は放射能が流れた高汚染地区、地図では橙色から黄緑色にあたる

「原発事故関連死」という言葉はよく使われます。しかしそれを立証する証拠も、手立ても私たちにはまったくない。これは単に石井清個人の問題ではなく、原発事故の被災者すべてが、等しく置かれた立場でもあります。彼の死を一つの教訓として、自らの置かれた立場を改めて自覚し、彼の死を無駄にすることのないよう、これから先私たちの行動に生かしていかなければならないと、今、私は強く思います」今まで都内の講演会などに招かれて話す場合は、自分の声が会場に吸い込まれるように、届いてゆくのがわかった。しかし今私と会場の間には見えない遮蔽幕でもあるかのように、空しく声がはね返ってくる。それは単に話の長さの故なのか、話の内容によるものかはわからない。もしかするとその両方であったかも知れなかった。「それでは盃をお取り下さい。長々しい挨拶をお詫びしつつ、彼の死の意味を心に刻みながら、献杯」、「献杯」と会場から返ってくる唱和は、弱々しくまばらだった。」（『故郷は帰るところにあらざりき』(8) 斎場「光琳」にて、より抜粋）　事故前まで一緒に食堂を切り盛りしていた私の従姉妹が、清叔父が亡くなった直後に「とうちゃんが死んだのは放射能と関係あるんですか?」と担当医に聞いたという。医者は「いいや、関係ないでしょう」と即答したという。国や県の姿勢に習った医者の「放射能は関係ない」という無責任な返事は、父親の不名誉な死の烙印から従姉妹を救ってくれたに違いない。引用した父の本の文中での、「献杯」の唱和が弱々しくまばらだった理由もわかる気がする。しかし、事故直後から、国や県が放射能の脅威を正しく伝えていたら、叔父は「大丈夫だ~」と言って山菜やきのこを食べただろうか?「放射能はただちに影響ない」「微量放射能は身体に良い」などという曖昧な言葉を清・叔父が少しでも疑っていれば、急性白血病という親戚の誰もが罹ったことのない病に倒れ死ぬことはなかったのではないか?と、叔父の死を思う時に必ず同じ疑問が脳裏に浮かぶ。そして事故さえなければ葛尾の『石井食堂』でラーメンを作っていたに違いなく「あの美味しいラーメンをもう一度食べたかったなー」と思うのである。

出典　文献

・（資料１）NHK ニュース・（資料２）2022..20 時事ドットコム
・（資料３）西山 栄氏・（資料４）1975.7.5 京都大学農学部遺伝学研究室・「原子力発電と微量放射線の影響」市川定夫氏
・（資料５）双葉地方原発反対同盟・（資料６）東京電力HD
・（資料７～9）編集部・（資料 10）写真家・飛田晋秀氏
・（資料 11）NHK 特集・被ばくの森 2021 見えてきた初期被ばくの実態
・（注１）ourPIanet-TV より